

「新司法試験合格者祝賀・激励会」

盛大に「日本」の宴

初の新司法試験で全国トップとなる131人の合格者を輩出した中央大学法科大学院の

「合格者祝賀・激励会」が10月18日、赤坂プリンスホテルで開かれた。

大学を出て法学既修2年コースを修了した最年少の「ストレート組」で24歳、

30代、40代の社会経験をへた人も多い。

年齢の幅、出身校の違いを超えて中大ロースクールに学び、そして難関を突破した

「一期生の輪——」日本」の宴がつづいた。

in 赤坂プリンスホテル

■威風堂々

赤プリ新館2階の「クリスタルパレス」。ハレの会場に、エルガー行進曲「威風堂々」が音量豊かに流れる。夜6時半、合格者たちの入場である。

合格者131人のうち、この日は122人が出席した。全合格者1000人の13%を占める「日本」の数

がどれほどのものか。とても中央のステージには並びきれない。やむな

くステージ下に順に並んだ列は、2

重3重になって長く入り口のあたり

までつづいている。「合格者が1ヶ

々、2ヶ々の他校なら訳なくステー

ジに上げて祝福するだろうが」とい

うOBの立ち話が聞こえた。「まあ、

これが日本一ゆえの皮肉だねえ」

アナウンサー小川光明さん（昭和

37年卒）の司会でお祝いのスピーチ

が始まる。

鈴木敏文理事長は、小淵内閣当時

に司法試験制度について議論した経

緯もあるという。理事長として今回

の成果を目の前にした喜びを語り、

「これからのスピード社会において、

スピードを持った優秀な法曹が増え

ていくことを望む」と期待をこめて

祝福した。永井和之総長・学長は、「今

回の成果は、多くの方々の方々の尽力によ

り達成できたこと」と大学を代表し

て感謝の言葉を述べた。

■合格で安心することなかれ

来賓挨拶。中央大学OBの衆議院

議員・元法務大臣の保岡興治氏は司

法改革の任にあたった立場から、「今回の波は戦後の司法改革の中でも大きなもの。制度を提案し実行していく、内外に通用していく法曹になるよう、自由とそれを美しくするフェアプレーの精神を大切にしていってほしい」と述べ、合格者たちを世界に向おうとする生まれたいばかりのひな鳥に喩えて激励の言葉をかけた。

最高裁判所からも中大OBのふたりの現役判事。甲斐中辰夫氏は、祝辞とともに「早速だが」と前置きをして、法曹として持すべき心得を。

「実務はそれを扱う者の人間性がないにじみ出るものであるから、決して単なる技術に傾倒してはならない」。そして、「自分の言動に責任を持たねばならない」。いずれも、仕事に

関して常についてまわることだと語った。「まわり道のようにでも毎日少しでも人間として自分を磨くよう

に。何年かのちには、それが評価されることになる。深い思考を積み重ねる心構えをし、日夜努力する法律

家になれ」。重い言葉に、これから

第一歩の司法研修へ臨む主役たちは真剣に耳を傾けていた。

学生記者 植松歩美（総合政策学部3年）
大池夏未（同）
竹下奈穂（経済学部2年）
池田園子（法学部2年）



才口千晴氏は、「製造物責任もあ
りますので」と切り出して、会場を
沸かせた。本来なら、弁護士から中
大法科大学院教授就任のはずだった。
04年開校を前にして、最高裁判事に

任官され就任。そんないきさつ含み
のジョークである。
4日間にわたる試験日程や試験問
題に触れて「知力ではなく体力だな
と思った」とユーモラスに合格をた

祝福のスピーチを笑顔で聞く“主役”たち

たえてから、
「司法研修所
で落第生が1
07人も出た。
合格で安心す
ることなかれ。
司法修習を終
えて1人前」
とハッパをか
け、「法曹の
大量輩出時代
が始まり、大
変な時代だけ
れども頑張っ
て生きていく
ように。大事
なのは邂逅かいこう、
出会いを大
切にしてほし
い」と語りか
けた。

「演説は短

く幸せは長く——ということだ」と
中山正暉・中央大学学員会会長が乾
杯の音頭をとり、歓談に移った。

■華やかに、盛大に

選ばれて、いまここにある栄光—
—女性の合格者も2割を占める（27
人）。フォーマルなドレス姿も少な
くなかった。ドレス姿が教授のもと
に小走りで駆け寄る。「お世話にな
りました」「よく頑張ったね、おめ
でとう」。仲間同士で語り合う。2
年間の「苦闘」や受験の「死闘」、
これからのこと……。語りながら、
笑みがこぼれる。歓談の輪は会場
いっぱい広がった。

終わりに高村正彦・元外相も挨拶
に駆けつけ、つづいて法科大学院
開校時の前理事長、阿部三郎氏の祝
辞。法科大学院からは大村雅彦法務
研究科長が謝辞とともに、「難関を
突破した皆さんには、これからよき
法曹となって中央大学法科大学院を
広めていってほしい」とはなむけの
言葉を述べた。

締めくくりは、合格者を代表して
ふたり。松石和也さんは「ハートフ
ルメソッドのもと、皆さんが指導し

てくださったおかげ」と感謝を述べ、
加藤雄士さんは「身についた法律の
基本的な礎を必ず役立て、早く同じ
舞台上に立てるよう頑張りたい」と挨拶した。

合格者の声

さまざまな顔がある。会場を歩き
ながら、合格者の声を拾った。

◆ふたり仲良く 「ふたり一緒に
ホッとしています。どちらかが泣
くことがなくて」と、笑って見つめ
あう菊地千春さんと恵美さん。顔も
そっくり、双子の姉妹である。そろつ



菊地千春さん（右）と恵美さん

ての合格だった。ともに法政大学卒、28歳。

弁護士を目指す理由について、千春さんは「法曹三者の中で弁護士という仕事は自分にとって、身近な存在」と話し、恵美さんは「学校の授業の一環のエクスターン・シップ(長



中大関係者のほか多くの来賓が顔をみせた

期休暇中などに法律事務所等において実務研修を受ける制度)を通して、弁護士という仕事に興味をもった

そうだ。「法曹界には中大出身者が多いので、エクスターン・シップなどの実習が充実しており、OB・OGの方々が非常に熱心で親切にして

いただきました」と恵美さん。

ロースクールの2年間は? 「授業、

予習、復習の毎日でした。でも、最後までしっかりとやれば、必ず司法試験に合格できると思います」

(千春さん)。喜びは2倍、悲しみは半分で、受験勉強中も

「励ましあってできたことがよかったのかな」という。

周囲は、千春さんと恵美さんが双子であることを知らず、「学部内で知らない人に声をかけられた

ことがある」というエピソードも。ちなみに、どちらがお姉さんですか?と聞くと、「……一応、私です」

と千春さんが遠慮がちに手を挙げた。

◆被害者救済 徳竹敬一さん(明治大学卒・26歳)

が、法曹を志したきっかけは中学生のときに目にした犯罪報道だったという。テレビに映っていたのは、被告人を弁護する

弁護士の姿。徳竹さんは「被害者は誰が守るのか」と感じ、以来一貫して「被害者救済」に取り組む弁護士

をめざしてきた。大学で法律を学ぶうち、「検察官のほうこそが、被害者により近い立場にあるべきなのは

は」と考え、現在は検察官を志しているそうだ。

「中央のロースクールに進学したのは、『被害者と法』という他にはない授業があったから。大学と違い、先生との距離が近い教室で問題意識をもって学べたことは大きかったですね」

特に心に残っているのは、「検事である奥村丈二先生(特任教授)の『僕がやらなきゃ誰もやらないんだよ』という言葉。この言葉を聞いて、

自分もこういう気持ちで取り組まなければ、と強く思いました。日本の被害者救済の現状は、アメリカと比べまだまだ遅れていますから」と話した。

鶴田佳子さん(中央大学卒・26歳)

も検事の道をめざしている。

「特捜部に入ろう、とは思っていません。どんな小さな事件でも、事件は事件。少しでも人の役に立てた方がいいと考えています」

諦めないこと。この言葉を常に心にとどめてきた。模試や試験で、成績が思うように振るわなかったこともあった。法科大学院の講義で、質問されて答えられないこともあった。何度もくじけそうになったという。

しかしその度に、大事な言葉を思い浮かべるようにしてきた。「行きつまって諦めないことが肝心です。

続けていけば結果は出てくるはずだから」。先輩たちへのメッセージだ。

◆若い人と一緒に ウェブ上で

の合格発表で、スクロールする間もなく自分の受験番号があった。「辛かったことや支えてくれた人たちの顔がフラッシュバックして

思わず涙しました」と石黒麻利子さん（中央大学卒）。40代主婦の合格



石黒麻利子さん

と笑う。大学入学と同時に夫の転勤が決まり現在も単身赴任だそうだ。

週末は浜松に出向き、夫の親の介護をする。睡眠時間を削つての多忙な二重の生活がつづいた。

「試験とかだと隣の人はライバルだと思えて言うでしょ。でも、蹴落とすんじゃないでみんなど頑張つて受かろうね、という和やかなムードだったんです」。名前も知らない学生とのど飴の交換をしたり、電車で頑張れと背中を叩いてもらったり……「ロースクールの友人にどんなに支えられたか知れません。柔らかい雰囲気は彼らをまた支えたにちがいない。

者だ。落ち着いた雰囲気、チェックの服がよく似合う。20年ほど前になる。文系への進学を中大出身の父親に反対され、理系に進み、医学部の大学院で医学博士号を取得した。さらに一念発起、2000年4月中大法学部に再入学し、ロースクールへ、そしてみごと合格を果たした。

「自分が学べたのはいろいろな人に支えられてきたお陰。それを他の人にも還元したい」という思いが法曹への道を選ばせた。

旦那さんは反対なさらなかったんですか？「夫とは別居してるんです」

◆サラリーマン経験 「両親に司法試験を受けていたことを伝えたのは、実は合格発表の少し前でした。今でもあんまりよく分かってないかも……」と横田康行さん（成蹊大学卒・31歳）は笑う。

サラリーマンからの転進組だ。「卒

業後は約7年の間、会社員として生活を送っていました。ごく普通の。その間に宅建、行政書士の資格を順にとつて……次は司法試験か、という感じでしたね」

ロースクールも夜間部を探したものの、会社と勉強の二足のワラジでは中途半端になってしまう。そう

決意して、安定した収入の上に成り立っていた生活を捨て、死に物狂いで勉強をするべく昼間の法科大学院を、なかでも、規模が大きくカリキュラムが充実している中央大学を選んだのだそうだ。

大きな決断ですね。「そうですね。それが一番大きな転換だったと思います。でもそれまでの仕事は、安定はしていたけどやはりどこか『人の仕事だ』と思つているところがあったので、合格した今となっては、これから実地で経験を積んでいくわけですが、責任感を持った仕事をやっていきたいと思つています」

◆中大を選んだ理由 岸寛樹さん（東京大学卒・25歳）に聞いた。数あるロースクールでなぜ中大を選んだのですか？「説明会の印象がよ



岸寛樹さん

かったんです。教授陣が『全員合格させる』と言いきったときには、強い意気込みを感じました。また、大学院では租税法を学びたかったので、それが充実しているところが気に入りましたね」

租税回避を主としたゼミでの活動は、マイナーなテーマだったため当初は3人しか人が集まらなかった。「どうにか仲間を増やそうと、目をつけた人を引き込んだんです。3人増に成功しました（笑）。気の置けない関わりもできて、彼らとは一生付き合える仲間であり続けると思いますがね」。友人たちとは、過去の判例を題材にしたディスカッションや答案の議論を通して、自信もヘコミ

も共有した。

教授と生徒との距離をととても近く感じたという。「この特徴がいいと思うし、気に入っているとんでもある」と岸さんは振り返る。「合格の報告をしたら、家ではみなホッとしている様子でした。ゼミのみんなの喜びも聞けたし本当によかった」

原直義さん（中央大学卒・26歳）

は「ハードだったが、力をつけるには最高の場所だった」と中大ロースクールの魅力を語る。始めは法律家になる気はなく、法学部国際企業関係法学科に入学。が、「2年から」多摩研究室で勉強をつづけて大学院へ。

「科目が幅広い中から選べるところが魅力でした」。講義も大教室での一方通行な感じではなく、ゼミのような双方向型。1週間に10時間ほどゼミ形式の講義があり、「予習は大変で、講義の場で突然当てられたときに答えなければならなかった。それで応用力が付いた」。常に緊張感を持って勉強できる環境がよかったです、という。

5月に試験があり、9月までの4

カ月、悶々とした気持ちですごした。合格が分かったとき、1番に知らせた相手は両親だ。今まで見守ってくれた、支えてくれたことへの感謝の気持ちだ。司法修習を終えた後は、

一般民事事件を取り扱う弁護士になりたい、と語る。「仕事をしていく中で力をつけていき、その後のことを考えたい」

園田稔さん（東京大学卒・25歳）

は「自分のキャリアを自分でデザインできるような職業につきたい、そう思って中央のロースクールへ」だったそうだ。

見かけからは想像しがたいのだが体育会系だそうで、学生時代はラクロス部に所属。法律家になるつもりもなかった、という。では就職活動も？「ああ、まあ遊びていど。国家公務員1種は最終面接まで残ったらしい。どこか表情や口調にも余裕が感じられる。就活が目前に控えている記者に、「やる気がある人は熱意が違うからすぐ分かるんですよ」と、面接のアドバイス。胸に刻んでおきます。

授業とは別に、1日の勉強時間

が8〜10時間。自主ゼミと呼ばれる仲間内での勉強会では、答案をメンバー同士で遠慮せず厳しく批評し合った。自分のことは自分でやるという個人意識の高い東大と、温かい雰囲気の中でOB・OGが後輩たちを育てる中大。好一对の校風だが、どちらが好き？「両方に思い入れがありますよ」と言った。

◆親身な指導 「教授陣の厚みと

アットホームな雰囲気に着かれて中大を選んだ」と語るのは辻山千絵さん（早稲田大学卒・26歳）。ところが、「いざ、入ってみたら、学生のレベルが高くて。ついていくのが大変で、登校拒否になりかけたこともありました」。そんなとき、担任の野村修也教授に救われた、という。「落ち込んでいるときに、中大ロースクールのクラス・アドバイザー制度と、その担任の野村先生の、いざとなったら相談に乗ってくれるという言葉が心の支えになりました」

両親が、障害のある子供たちの教育に携わっていることから、「自分が子供たちに対してできることは？」と考えたことが弁護士を志し

た原点。「はじめは弁護士になりたいと思っていましたが、今は裁判官として社会に貢献できる仕事をしていきたいと考えています」

◆ボストン大学卒 「実を言うと、

大きいところなら他でもよかったです。カリキュラムが充実していればのことですが。パンフレットを取り寄せ中大への入学を決めてからは、期待通り。国連大学の授業にも参加させてもらったし、エクスターンシップで、さまざまな経験ができましたし、新司法試験の選択科目である、『国際公法』を指導してくださった先生方に非常に恵まれていた」と榎實秀幸



榎實秀幸さん

さん。米・ボストン大学卒である。長身、体格もいい。見上げるように

して話を聞いた。

「えーと、日本では高校2年で中退です」。神戸出身で、高校中退後に渡米。ボストン大学で数学を中心とした経済学を学び、修士号を取得している。

「本当は学者になろうと思つていたんですが、数学的なセンスがなかったみたいで(笑)。日本に帰ってきてからは何をやるかがはっきりせず、しばらくはアルバイトをやつていましたよ。以前から政治などに興味があったから、それだったら法学を目指してみよう」と

30歳になる。新司法試験合格の知らせを聞いて、「やつと手を離れたか」と両親も安心されたそうだ。

勉強のスタイルもはっきりしている。クラスなどの雰囲気はよかったが、授業についていくことだけを考えて「よく聞く『答案評価のし合い』はなかったですね。基本的に、勉強の仲間……っていうのはあまり。ただ、授業を信じていました。アメリカにいたときの遊学——つて感じからしたら真剣でしたから」

経済学と法律学。「現実を大きく



横十萌子さん

捉えた感じが経済だとすると、法律はもつと細かい単位でのとらえ方になるかも。法律の下では、常に依頼者が手前について、自分が必要とされてからが仕事になる」。理想の法曹のイメージは? 「とにかく自分が強くないとだめだな、と思うようになりました。いろんな誘惑にも勝たなければならぬし(笑)。これからは、相手の最大の利益を考えなくてはならない」。リーガル・タフネス——タフな法曹は中大法科大学院が描く理想像である。

◆文武両道の華 ひとときわ明るい笑顔。会場のあるこちらを歩いて、

座を盛り立てるような女性がいた。横十萌子さん(中央大学卒・25歳)である。

たくさんの大学が集まる法科大学院で、「中大生のカラードはどちらかといえば、地味だったかな」となるのだが、「地味な中央」を一人で一新するような、言つてはナンだけど、法曹の世界に行つてしまふには惜しいような社交性……。

多摩キャンパスでは学研連の正法会で勉強した。併せて、合気道部に所属。「根は体育会系なんですよ」と笑つた。試験前以外は、週3回の稽古は欠かさず出た。合宿へも参加した。「数をがむしゃらにこなすのではなく、集中する形で」。合間の時間には参考書を開いた。「合気道も司法試験の勉強もする、というのは苦しい面もあったわよ。それでも、同期や先輩が支えてくれたから、乗り越えられた。4年間続けてきて、本当によかったと思う」

法科大学院に進んで、「検事や弁護士の方に会つて目指す道が広がりました」と話す。以前は考えていなかったビジネス弁護士、検事の

仕事にも関心を持つようになった。

中大が大好き、と満面の笑みを浮かべる。「中大のためなら、自分ができることをしたい。本当にお世話になったから」。ロースクールでは中大と他大を越えた絆、新たな連帯感が生まれた。のちのち「中大ロースクール一期生の会」が生まれれば、花の幹事役・世話役は、この人ではないかしら。

◆打率よりヒット数 2時間の式次第が終わつてからも、あちこちで会話がつついている。法科大学院の教授陣の顔も明るかった。全体の空気に弾んだようなものがある。

宗像紀夫教授の姿もあった。元東京地検特捜部長、名古屋高検検事長からの就任だった。ざつとばらん、歯に衣着せぬ語り口に特徴がある。教授のこんな言葉で会場からのリポートを締めくくろう。

「合格者数では日本一だったが合格率では……という声もあったけどね。打率よりヒット数、だよ。131は大変な数だ。よく頑張つたと思う。自信をもって送り出せる131人ですよ」